

モダン・ビルディングスロマンの兆候： —ジェイムズ・ジョイス『若い芸術家の肖像』

外国語共通教育センター 秋山 義典

1. アイルランドの位置づけ

『若い芸術家の肖像』(1916)の冒頭の章でスティーヴン・ディーダラスは、教室、学校、教会、家族を通してアイルランドという国を位置づけることによって混沌とした体験の混沌に秩序を与えようとしている。この「地理的階級」というのは、世界に対してアイルランドをどのようにとらえているのかという点である。この小説の中で、取り上げられているアイルランド的なものとはなにかを考察したいと思う。伝統的な教養小説のなかには、国家的なアイデンティティの象徴的な場面を垣間見ることが可能であると思われるが、たとえば、代表的な教養小説であるゲーテの『ウィルヘルム・マイスター』に見られる国家の姿と登場人物の密接なかわりが、ジョイスのこの教養小説の主人公に当てはまるかもしれない。そこで、スティーヴンがアイルランドをどのように認識して表現しているのだろうか。国家の姿がはっきりと彼の中に存在して、混沌とした自国の姿にある形式が与えられて、自国から離脱する主体に変わりうるのであろうか。

2. スティーヴンの「世界」と自己の地理的な位置関係

スティーヴンは幼い時、学校で地理を教わった経験を思い出した。彼が子供のころの記憶はぼんやりしていた。鮮明な瞬間を思い出そうとしているが、思い起こすのは名前だけであった。

The memory of his childhood suddenly grew dim. He tried to call forth some of its vivid moments but could not. He recalled only names: Dante, Parnell, Clane, Clongowes. A little boy had been taught geography by an old woman who kept two brushes in her wardrobe. Then he had been sent away from home to a college (98).

年をとった女性によって地理を教えられたスティーヴン。地理を学んだあと、彼は家から遠く離れて学校に追いやられることになったという。ここで取り上げられる「地理(geography)」とはどこに何があるのか、正確に位置関係を教わるという経験があったということになるだろう。言い換えると、異国の土地を地図上で指摘できるスキルである。自分の暮らす小さな世界が大きな世界のどこに位置するのか、それを意識する世界認識のプロセスである。しかし、それは同時に世界の中で異国の土地を獲得する帝国主義の精神に共通する面もある。

かれが地理の勉強をしようとして教科書を開いたときに自分と世界を関係を次のように説明した。

Stephen Dedalus
Class of Elements
Clongowes Wood College
Sallins
County Kildare
Ireland
Europe
The World
The Universe (12)

ステイーヴンが描いた世界の位置関係は一番小さいものから、順番に大きなものへと移行している。自分が存在する位置から始まり、大きい存在の下方へ降りていく。下の行くほど世界は拡大していく。かれは地理の教科書でアメリカの地名は覚えることができないと述べた後、さらにさまざまな土地がそれぞれちがう国にあり、その国にはそれぞれの大陸がある。大陸は世界の中にあり、世界は宇宙の中にあるという。ステイーヴンは宇宙の先には何があるのか、自問する。この世界の組織図にはアイルランドは書かれている。ヨーロッパのなかには、アイルランドが位置づけられていると読める。それに反してこのヨーロッパの中には英国が記述されていない。世界のなかに英国を念頭に置きつつも、その次がヨーロッパと書いている。先にみたように、地理の授業は受けたステイーヴンであったが、どこにどの国家が地理上に存在しているのか知らないわけではない。英国の存在を意識しすぎて、故意に英国の位置がぬかれてしまったのだろうか。アイルランドをこの位置に置くことにはどのような意味があるのか。この位置関係は、ステイーヴンが念頭に置くアイルランドの国家の見えにくい姿を物語っているのではないだろうか。

次の世界観はクロンコウズ・カレッジの友人フレミングが書きつけたものである。ステイーヴンの世界観とは異なっている。

Stephen Dedalus is my name,
Ireland is my nation,
Clongowes is my dwellingplace
And heaven my expectation. (13)

こうしたステイーヴンの書きつけた世界に対して、クロンコウズ・カレッジの友人フレミングは、ステイーヴンという個人とアイルランドという国家を上下に位置づけている。ステイーヴンとアイルランドの国家が連続してつながっているイメージである。ここには地理上の位置関係が反映されている。

「反乱をおこそうじゃないか」と述べて学校でのナショナリストを表明するフレミングはアイルランドが自分の国家であり、その関係性が近い認識が表明される。フレミングにとってアイルランドは明確な国家のイメージであり、自分と国家の関係には曖昧な関係は見られ

ない。さらにスティーヴンのすぐ下にアイルランドの存在がある関係が暗示するのが国家と個人の距離の近さを感じさせる。国家と個人の関係も緊密であるといえる。

3. 田舎のアイルランド

スティーヴンの描いた世界の構図に戻ってみる。この図にはクロンゴウズ・ウッド・コレッジとその下のサリンズが置かれている。この二つの地名の上下関係を見てみよう。サリンズ(Sallins)は、田園の空間であり、信心深い農民が暮らしている。クロンゴウズ・カレッジから4マイルほど離れた小さな村がサリンズである。馬車が田舎道を走り、サリンズに通じる道の途中でスティーヴンが目撃するものが小屋の半開きになった戸口に子供を抱いた女性の姿であった。

They lived in Clane, a fellow said: there were little cottages there and he had seen a woman standing at the halfdoor of a cottage with a child in her arms, as the cars had come past from Sallins. It would be lovely to sleep for one night in that cottage before the fire of smorking turf, in the dark lit by the fire, in the warm dark, breathing the smell of the peasants, air and rain and turf and corduroy. But, O, the road there between the trees was dark! You would be lost in the dark. It made him afraid to think of how it was (15).

スティーヴンは、馬車(car)でサリンズを通り過ぎたとき、あの田舎の小屋で一晩眠れたら素晴らしいだろうなと思ひながら、アイルランドの美しい田園の農民たちのにおいを吸い込みながら眠りたいなどと語っている。田園風景の中で、子供を抱いた女性が立っている姿が印象的である。こうした田園世界が表象する世界がまさにスティーヴンにとってのアイルランドの姿であろう。田舎のアイルランドである。

4. 「馬車」や「汽車」が走る道とは

スティーヴンはサリンズの田園風景を賞賛しつつも、一方でサリンズに続く道が暗闇で、まったく見えないような場所で道に迷い込んで自分がどこにいるのか、わからなくなってしまうのではないかと恐ろしくなったという。ここで言及される道(the road)とは馬車道であり、クロンゴウズ・カレッジとサリンズを結んでいる。しかし、スティーヴンは、その道を恐れている。その途中の道は暗いので「迷子になってしまうかもしれない」という。この道とはローカルな世界を真つ暗な闇の未知なる世界にスティーヴンを連れ出す道になるかもしれない回路なのである。スティーヴンのいう「暗い、恐ろしいもの」とは暖かい闇とは違っている。自分の住むところから学校を結ぶ道であり、この田舎道を経ることによってもしかすると、ダブリンという小さなローカルな世界から外の世界につながる、つまりそれは、国家的なものへの移動を可能してしまうグローバルな通路を暗示しているように思える。自国アイルランドとは、ローカルな場所であり、田舎の風景にみられるアイルランドの姿であるように見える。しかし、それは同時に、国家的なものにつながる未知なる闇である。道に関しては、こうした暗い世界への恐怖感が特徴である。

馬車が繋いでいく道に恐ろしさを覚えるスティーヴンの心境とは反対に、馬車の走る様子にこころより共感を示す人々もいる。

The cars drove past the chapel and all caps were raised. They drove merrily along the country roads. The drivers pointed with their whips to Bodinstown. The fellow cheered. They passed the farmhouse of the Jolly Farmer. Cheer after cheer after cheer. Through Clane they drove, cheering and cheered. The peasant women stood at the halfdoors, the men stood here and there. The lovely smell there was in the wintry air: the smell of Clane: rain and wintry air and turf smouldering and corduroy (17).

馬車が礼拝堂の前を通りすぎるとき、多くの人々が帽子を取って敬意を示す。馬車はうきうきと (merrily) 田舎道を走り抜けていく。クレインとは大学から 1.5 マイルの場所。御者はむちで指し示して、あれがボーデズタウンだと教えてくれる。このボーデズタウンとはキルデア郡の町であり、アイルランド共和国の父、ウルフ・トーン (Wolfe Tone) の墓がある。この人物はアイルランドの国家的な英雄である。そこを通りかかった御者がむちを使って合図を送った。冬の空気のなかをフレー、フレーと歓喜が飛び交う移動の道が描かれる。この馬車の走る田舎道の様子は、スティーヴンの述べる暗く迷子になるような道の様子とはかなり対照的である。小屋の半開きになった戸口に子供を抱いた女性は、同じようにこの田園にたたずんでいる。しかし、この場面にはスティーヴンの姿は見えない。アイルランドの国家を愛する人々にはスティーヴンのように不安な闇などあり得ない。

言うまでもなく、スティーヴンは、学校や教会で呼び起されたアイルランドの英雄をたてる人々には必ずしも共感を感じ取ることができない。手さぐりしながら、エグザイルの選択肢に向かおうとしているからなのか。

さらにこの光景は、小説の後半で再び、スティーヴンの記憶の中で田舎のアイルランドがよみがえる。走る馬車の窓から見えた「小屋の半開きになった戸口に子供を抱いた女性」の姿は、かつてスティーヴンが目撃した農民の女性を思い出した。その姿が自分自身の民族の典型として見えている。その女性は友人のデイヴァンを誘惑しようとした女性と連想される。

The last words of Davin's story sang in his memory and the figure of the woman in the story stood forth, reflected in other figures of the peasant women whom he had seen standing in the doorways at Clane as the college cars drove by, as a type of her race and his own, a batlike soul walking to the consciousness of itself in darkness and secrecy and loneliness and, through the eyes and voice and gesture of a woman without guile, calling the stranger to her bed (198).

ディウインの話からスティーヴンの記憶の中の「農夫の女性たち」の姿が再び現れる。その姿は美しい田園の光景を背景にしたローカルな女性の姿だった。それがコウモリのような精神で闇と秘密の中で自らの意識のなかに歩いていく別のイメージに置き換えられている。

アイルランドの国民的なイメージ像である。それはかれの意識の変化を示している。「自分自身の民族の典型 (a type of her race and his own)」として思い起こされるのである。田園風景のローカルな女性が地理的な位置を変えて、国民的な位置に置き換わっている。

5. 「父性」のアイルランド、男性化した国家の姿

従来の教養小説は、自己形成と成長のプロセスを描くのが特徴である。グレゴリー・キャツスルによれば、教養小説の主人公は、伝統的には父性を強く求めることで自己の成長を展開することができるといわれる。ここでいう「父性」なるものは、家父長的な視点からの男性同士の友情や同性間のつながりというべき男性的なアイデンティティを強調する傾向がみられる。つまり「父の法」がどのように扱われているのか、考察してみよう。「父の法」を求めるゲーテ型の主人公が、国家形成にも大いに影響を与えることになる。

スティーヴンの周りの父親や教師たちはなによりもまず紳士になれ、強く男らしく健康になるように命じる声が聞こえてくる。アイルランド復興運動の気運が高まるとアイルランドに忠実になるように、母国語の伝統を高めることに協力するように命じる声も聞こえてくるのである。紳士になることや、国民復興運動に共鳴することは父親の権威に関連することになるだろう。

While his mind had been pursuing its intangible phantoms and turning in irresolution from such pursuit he had heard about him the constant voices of his father and of his masters, urging him to be a gentleman above all things and urging him to be a good catholic above all things. These voices had now come to be hollowsounding in his ears. When the gymnasium had been opened he had heard another voice urging him to be strong and manly and healthy and when the movement towards national revival had begun to be felt in the college yet another voice had bidden him to be true to his country and help to raise up her fallen language and tradition. In the profane world, as he foresaw, a worldly voice would bid him raise up his father's fallen state by his labours and, meanwhile, the voice of his school comrades urged him to be a decent fellow, to shield others from blame or to beg them off and to do his best to get free days for the school (88).

せつせと働いて父親が没落させた家運を回復するように求めてくるだろう。他の学生をかばって罰から救ってやるように、父親の教えはスティーヴンに伝えられる。こうした父の教えは、まさに権威であり、かれが同化すべき父の法というものである。

And it was the dim of all these hollowsounding voices that made him halt irresolutely in the pursuit of phantoms. He gave them ear only for a time but he was happy only when he was far from them, beyond their call, alone or in the company of phantasmal comrades (88-89).

このようにスティーヴンを説得する声が聞こえてきたときにでも、かれの耳にはそういう声はうつろに (hollowsounding) 聞こえるだけであった。かれはこころ揺らぎ、ためらって立ち止まってしまう。こうした「父の法」がとどかない、遠くはなれたところでひとりになれば、それが幸せなきもちになれるという。

さらにスティーヴンにとっての「父の法」が破綻していると思われる場面がある。父親とコークに行く夜行郵便列車のなかで、父親がコークでの思い出を話したり、若い時代の出来事を聞いていた。しかし、スティーヴンは何の共感も覚えることがない。かれは父親の語る物語に同情もなく聞き流してしまうことになる。

He listened without sympathy to his father's evocation of Cork and of scenes of his youth, a tale broken by sights or droughts from his pocketflask whenever the image of some dead friend appeared in it or whenever the evoker remembered suddenly the purpose of his actual visit. Stephen heard but could feel no pity (92).

スティーヴンは男性社会階層に関与することが可能であるにもかかわらず、その道を進まもうとはしない。自分では現実の世界が大きく影響することなく、かれのこころのなかの叫びのこだまが駆け抜ける。外の世界からの訴えかけには反応をしめすことができない。

He heard the sob passing loudly down his father's throat and opened his eyes with a nervous impulse. The sunlight breaking suddenly on his sight turned the sky and clouds into a fantastic world of somber masses with lakelike spaces of dark rosy light. His very brain was sick and powerless. he could scarcely interpret the letters of the signboards of the shops. By his monstrous way of life he seemed to have put himself beyond the limits of reality. Nothing moved him or spoke to him from the real world unless he heard in it an echo of the infuriated cries within him (98).

父親がすすり泣く声が聞きながら、スティーヴンは父親の自慢話を聞いている。現実世界からスティーヴンに語りかけるものがないという。何一つとして語りかけてこない。地上の、人間の訴えかけに反応を示すことができないし、父親の声を聞くだけでかれは、うんざりして、気が重くなると語っている。

この場面から、スティーヴンは「父の法」を信頼していないことを表していることがわかる。父親の語るアイルランドとは、国家的な権威であり、紳士であることである。まさにこうした姿勢がアイルランドのナショナルアイデンティティであり、アイルランドの男性性というべきものである。

6. 「水」のアイルランド、揺れ動く象徴

こうした強固なアイルランドの国家像が旧世代のスティーヴンの父親から示されたが、その一方でスティーヴンの側では奇妙に揺れ動く姿のアイルランドのイメージが『肖像』の中

には登場している。アイルランドとは液体的なイメージであり、そういう水、波のアレゴリーとして見て取れる。水たまりや川、波、汗や唾という体液もスティーヴンが経験するものを表すときにイメージとして特徴的である。友人にトイレの汚水溜めに突き落とされたりする。彼は言う、冷たくてぬるぬるした感覚が身体に広がっていると。スティーヴンが波止場をぶらつく場面では、水のイメージの「泡 (scum)」で流動する様子を表現している。

He passed unchallenged among the docks and along the quays wondering at the multitude of corks that lay bobbing on the surface of water in a thick yellow scum, at the crowds of quay porters and the rumbling carts and the ill-dressed bearded policeman. The vastness and strangeness of the life suggested to him by the bales of merchandise stocked along the walls or swung aloft out of the holds of steamers walked again in him the unrest which had sent him wandering in the evening from garden to garden in search of Mercedes (69).

スティーヴンがさまよい歩きながら落ち着かない気持ちを隠せない。ふわふわと漂うコルク片が人生の広大さや不思議さで奇妙に揺れる感覚が水面で揺れ動いている。波止場の人々、動き回る荷車、動き回る警察官など奇妙に揺れる落ち着きのない気持ちがよみがえってくるという。やがてスティーヴンは家庭、教会、学校、国家という制度の環の内部から外の世界に歩み出ていくことになるが、彼の中でこの揺れ動くイメージは、男性的な象徴とは異なるものである。「父の法」によって完結する制度的な集約には見えない。アイルランドの国家アイデンティティの不安定さ、不確実性に読みかえることも可能ではないだろうか。

How foolish his aim had been! He had tried to build a breakwater of order and elegance against the sordid tide of life without him and to dam up, by rules of conduct and active interests and new filial relations, the powerful recurrence of the tides within him. Useless. From without as from within the water had flowed over his barriers: their tides began once more to jostle fiercely above the crumbled mole (104).

スティーヴンは自分の人生を防波堤と波のイメージを使って表現している。行動規範と積極的な関心と新しい親子関係をつかって、薄汚い生活の潮を食い止めようとしたという。しかし、それは何とばかりかかえていたことかと思える。一方で意識の流れとおさえる「防波堤 (bulwark)」「波止場 (quays)」「土手 (levee)」を使って、外部からの圧力を暗示している。ジェド・エスティが指摘するように、不安定に揺れ動く水のイメージのなかにアイルランドの姿を見ることができる。これはスティーヴンの父親が息子に示そう見せた男性的な国家の姿とは対照的な位置に見える。言い換えると、スティーヴンの父親は家父長的な権力が集中する帝国のイメージを強調する一方で、父親と同化することを拒否しようとする懐疑的なスティーヴン。かれはこの揺れ動くアイルランドを不安定なイメージとして描くことで、不安な、しかし、モダニストにとっての新しい国家の輪郭を示しているように思えるのである。『表

象のアイランド』のテリー・イーグルトンは、「ヨーロッパのアヴァン・ギャルドと接触することによって、ジョイスは、アイランドに逆行しながら、祖先返りの形式ではなく、モダンな形式によってそれを創造しなおすことができるようになる。ジョイスは、謹厳実直な嘆美主義によって、ケルト文化礼讃者たちに反撃を加え、かれらが青年アイランド運動に向けていた軽蔑に近いものによって、彼らのナショナリズム的な信念に対抗する」と分析する。イーグルトンが指摘するように『若い芸術家の肖像』は従来のアイランドの国家出現が主人公のアイデンティティ形成に直接結びつかないことを改めて確認させてくれる。父親の視点ではアイランドとは魂の国家であった。成長を促す国家歴史的な理想化された国であったが、息子のスティーヴンの目には停止した成長としての不安定な揺れ動く国家に映し出されている。

引証資料

Attridge, Derek. *Semicolonial Joyce*, Cambridge University Press, 2000.

Castle, Gregory. *Reading the Modernist Bildungsroman*, University Press of Florida, 2006.

Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man*, Penguin, 1992.

Esty, Jed. *Unseasonable Youth*, Oxford UP, 2012.

イーグルトン、テリー、鈴木聡訳『表象のアイランド』紀伊国屋書店、1997 年。